

差別は凶器より鋭い刃をもっている

差別は相手の確信、正義感をえぐる

沖縄・東村高江での米軍の米軍北部訓練場ヘリパッド移設工事現場で、警備していた大阪府警の機動隊員がフェンスをつかんで抗議していた反対派住民に「どこつかんどるんじゃ、ぼけ、土人が」と発言したと報道されました。当該の機動隊員も認めています。

機動隊員の発言は注意喚起や警告ではありません。単なるネガティブな発言ではありません。抵抗しているのが地元の人たち、沖縄の住民であることをはっきりと認識したうえでのものです。「国・本土の政策に黙って従え、おまえらには反対する権利などないんだ」という思いが込められています。

相手の確信、正義感をえぐり、否定することで意欲を削ぎ、後退させる目的で発したのです。だから差別なのです。差別は本物の刃物より鋭いです。機動隊員はその効果があると思うから発したのです。国と自分らの行為の正当性を疑いません。

これに対して大阪府の松井知事はツイッターに「ネットで映像を見ましたが、表現が不適切だったとしても、大阪府警の警官が一生懸命命令に従い職務を遂行していたことがわかりました。出張ご苦労様」と書き込みました。機動隊の発言は人権感覚をうかがいますが、知事の書き込みは人権という意識が不在です。

差別発言をした人たちには罪悪感がない

「土人」発言には、前提として本土と沖縄には主従の関係が存在しています。地方自治など存在しません。

沖縄の人びとはなぜ本土に従わなければならないのか。さまざまな被害を甚大に被っていても無視され、我慢を強いられるのか。理由は沖縄だから、沖縄で生まれ育った住民だからです。それ以外の理由はありません。沖縄の実態はアメリカと本土の植民地状態にあります。

沖縄で生まれ育った人びとはそれ自身がアイデンティティーです。それを変えなければならない理由は何もないし、変わることもできません。**人間が努力しても変えることができないことを否定して攻撃する行為は差別です。**さらには生存権まで否定されています。

松井知事は府警を統括する立場にあります。このような発言が機動隊員から発せられたということは、組織とし職員・隊員への人権教育が不十分だったということです。その認識に至らなかったということ自体が問題です。本土の政治家の意思がストレートに表明されたのだと思います。だから記者会見では、住民の側も乱暴な発言をしていると相殺して許される

ような発言をしたのです。書きこみにある「表現が不適切」という問題ではありません。

現在の本土と沖縄の関係を当然のことととらえています。言葉は状況の中で発せられます。無意識に潜在的に持っている意識が吐かれたのです。

「私の目の前で差別発言をした人たちの共通点は『これっぽっちも罪悪感を感じていなかった』という点だった。」(浦本誉至史著『江戸・東京の被差別部落の歴史』明石書店)。

鶴保庸介沖縄担当相は8日の参院内閣委員会で、「土人発言」について「差別であると断じることが到底できない」と答弁しました。そうならば、沖縄を訪問して住民の前で「土人の皆さん・・・」とあいさつを試みてはどうだろうか。

自分では実行する“勇氣”がない悪意を他者がおこなったときに、煽り立てて優越感を共有するような姿勢が差別を助長して定着、蔓延させていきます。

機動隊員からは「シナ人」という差別発言も発せられました。

差別意識は歴史的に作りあげられます。歴史認識が薄いというよりは歪曲された歴史を教え込まれた結果として排外主義が生み出されます。

最近、憲法学者らが『ヘイトスピーチはどこまで許されるのか』という本を出しました。許されるヘイトスピーチなどありません。このような人びとの痛みを知らない者の感性が社会を支配しています。

児童のいじめは大人たちの行動の再現

東京電力福島第1原発事故で福島県から横浜市に自主避難した中学1年の男子生徒が、転校先の横浜市立小学校で同級生のいじめを受けて不登校になっていたことがわかりました。避難直後から、同級生に名前に「菌」をつけて呼ばれたり、暴力を振るわれたりするいじめにあっていました。「原発事故の賠償金をもらっているだろう」といわれて金銭を要求されました。

横浜市教育委員会をふくめてマスコミ等は学校の対応のまずさを指摘しています。しかし同じような事件は震災直後から各地の大人社会で起きていました。今回の事件はそのような大人たちの行動の再現です。そこから目をそらすと社会のなかに存在している本質的問題が隠されてしまいます

今回の事件が始まったのは、2011年8月、震災でなぎ倒された陸前高田市の松の木で作った薪が京都の五山送り火で焚かれるのを拒否された時と同じです。陸前高田の被災者は検査をして安全な薪に亡くなった方たちへの思いを書いて託しました。被災者が直接接触したものでした。しかしそれ以前にもいくつかの自治体からは被災地の瓦礫処理の依頼にたいする拒否行動が起こっていました。

この事件から、被災地ではいつまでも全国から寄せられる善意に依拠するのではなく自立しようと意識を切り替えました。

差別は作られる

横浜の小学校で児童が福島から避難してきた名前に「菌」をつけて呼び、暴力を振るった行為と京都の五山送り火で陸前高田からの薪を拒否した行為が重なります。

薪が危険だというのなら陸前高田に住んでいる人びとや、福島原発からみて陸前高田のものと手前で生活している人びとも危険に曝されていることとなります。その人びとに思いを寄せることはあったのでしょうか。危険だから早く避難しろと呼びかけたのでしょうか。

福島の被災者は危険なところから、危険でないところに避難してきました。そこで「風評被害」にあいました。放射能が人から人へと伝播しないことは広島・長崎の負の経験から知られています。

しかし恐怖感自分たちだけは安全地帯を維持して防衛したいという思いになり、根拠のない新たな基準を作って共同行動で排除しました。共同行動が「風評」を確信させ福島に関連することの一切を排除します。差別は作り事から始まります。しかしいつのまにか事実と認識されます。

横浜の電力は東京電力が供給しています。事故は想定できなかったといっても自分たちが利用している電力会社で発生した事故です。その結果、関係のない多くの人びとが住居を追われ、生活を奪われました。しかしその人びとに思いをはせることには至りません。

福島から避難してきた児童をいじめた児童たちは、大人たちの行動を真似しました。被害は事実だと信じ込み、排除は許されるものと受け止めました。

非難してきた児童はなにが行なわれているかがわからないなかで不安感をおぼえ、無力化していきました。

するといじめた児童たちは「放射能が移る」といっていたのに「菌」に対して直接身体的暴力を振るうようになりました。放射能の危険がないことを自覚しています。非難してきた児童を自分たちが優位に立ってもてあそぶ対象としていきます。その関係性が定着していきます。

為政者は差別構造を利用する

「福島土人」という言葉が福島の人たちをバッシングする時に使われています。例えば、「福島原発事故で国や電力会社から補償を受けながらもさらに要求を続け、働かないで楽しんでいる人たち」を指す時です。

しかしなぜ避難する事態になったのか、生活はどう変えられたか、国や電力会社の補償はどの程度なのか、事故をおこした原発そのものがどのような状態にあるのかについては関心を示そうとしません。ただ非難している人びとが“ごねている”怠惰なやつらが楽しんでいるとしかとらえません。

沖縄の人びとに対する本土の多くの人びとの発言と共通します。歪曲された歴史を教え込

まれ、排外主義をうえつけられた者たちや、真面目に働いていても低賃金で苦勞させられている労働者の一部の人たちは“操られている”“ごねている”“楽しんでいる”と思込まされて敵対を煽られ、対立させられています。それが「基地に対する支援金で生活しているくせに」「補助金もらって遊んでいる」です。

いじめられた児童が「原発事故の賠償金をもらっているだろう」と脅されたのはそう大人から教え込まれたからです。いじめた児童といじめられた児童の関係が支配・被支配になりました。

事実は違います。福島の人たちは奪われた生活を補償させるために、事故の責任を迫及し、自分たちと同じ苦しみを他の人たちには味わせないため、そのために原発のない社会を作るために東京電力を相手取って責任を迫及して裁判を起こしているのです。

沖縄への差別は、ヤマトが歴史的に作ってきました。外交・防衛、経済成長のために犠牲にしてきました。アメとムチのアメの行使に際しては「沖縄の振興のために」と発言します。実際は沖縄の振興のための最大の足かせが基地の存在になっています。差別を助長させています。今、沖縄の人たちはその主張をしているのです。

そもそも基地も原発も人びとと共存できません。

デマゴギーが差別を助長します。為政者は差別を放置して対立を煽り、利用します。

「沖縄から東京がよく見える」と最初に言ったのは永六輔だと言われています。東京からも見ようとするとよく見えます。福島もそうです。しかし見ようとしないなら見えません。

普天間、辺野古、高江、伊江島の問題、そして福島を自分に引き寄せて考えてみる必要があります。福島から避難してきた児童の「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた。」となんとかたえぬいてきたの思いを学校でおきた問題と限定しないで共有する必要があります。